日本福音ルーテル教会　教会史資料編纂委員会ニュース

歴史は語る

2011年4月18日発行　第3号　　編集責任者　青田　勇

特集　「九州学院の院長」

九州学院初代院長 遠山参良先生

九州学院理事
田中　善一

九州学院初代院長の遠山参良先生は一八六六(慶応二)年熊本県鏡町(現八代市)で誕生、鏡町小学校を経て、一八七五(明治八)年九月わずか一〇歳で鏡町から熊本洋学校に入学しました。

この熊本洋学校は明治維新で薩長土肥に遅れをとった肥後藩(現熊本県)が米国から退役軍人の陸軍大尉ラファイエット・L・ジェーンズを教師として招聘し、一八七一(明治四)年九月に開校した学校で、入学者は全員給費生(学費も寮費も無料の全寮制)の学校でした。各地から俊英が集まりました。開校して四年後には第一回の卒業生を出しております。

入学した翌年一八七六(明治九)年一月三〇日、日本のキリスト教にとって歴史的な事件が起こりました。熊本洋学校の生徒三五名による、所謂「花岡山の結盟」です。熊本洋学校から多くのキリスト教信者が出たという理由でその年の八月には熊本洋学校は廃校になってしまいました。遠山少年が入学してから一年後のことです。そこで約三〇名の者が連れ立って京都に行き、新島襄が前年創立した同志社に入学しました。遠山少年も先輩に連れられて同志社に一一歳で入学しますが、翌一八七七(明治一〇)年に西南戦争が勃発、熊本は戦禍に見舞われ、間もなく遠山少年は熊本に帰ってしまいました。

その後、県内にできました熊本洋学校の卒業生によって創られた鏡英学校や広取学校などで学んでいます。

一八八四(明治一七)年、アメリカ人宣教師によって創立された長崎の鎮西学院の前身カブリ学校に一九歳で入学し、四年後の一八八八(明治二一)年カブリ学校の第一回卒業生となりました。暫らく母校の英語普通科の教師となりますが、四年後の一八九二(明治二五)年二七歳のときアメリカに渡り、オハイオ州のオハイオウェスレアン大学に入学して、生物学を専攻し、三年後に卒業、さらに大学院で一年間学び、マスター・オブ・サイエンス(理学修士)の学位を受領して帰国しました。

遠山先生は帰国すると再び母校の教壇に立ちまして、大学で専攻した生物学と英語を教えました。二年後、遠山先生にとって新たな転機がやってまいりました。それは現在熊本大学となっています第五高等学校の英語科の教師となって一八九九(明治三二)年故郷熊本に帰ってまいりました。三四歳の時であります。

翌一九〇〇(明治三三)年第五高等学校英語科教授となり、爾来一〇年間第五高等学校教授として勤めました。

九州学院の創立者C.L.ブラウン先生は一八九九(明治三二)年にキリスト教の伝道のために熊本に来ました。同時に第五高等学校の非常勤講師となり英語を教えております。

ブラウン先生と遠山参良先生はほぼ同時期に第五高等学校の教壇に立たれました。キリスト教の米国人宣教師であるブラウン先生と米国に留学され、またクリスチャンである遠山参良先生とは当然、すぐに親しくなったに違いありません。

その後ブラウン先生は遠山参良先生の人柄をよく知り、遠山参良先生に新しく創る学校九州学院について話され、院長就任を懇請されたことでしょう。

遠山先生は、当時の九州の最高学府第五高等学校教授の職を投げ打って、一私立ミッションスクールに身を投じる決心をしたのでありました。若き日に一年間だけ学んだ熊本洋学校のことが脳裏にあったのかも知れません。

ブラウン先生は遠山参良先生に院長として学校教育運営のすべてをまかされました。しかも創立して五年後の第一回卒業生を見届けるとアメリカに帰って行きました。そして選ばれて北米南部一致ルーテル教会の外国伝道局の幹事に就任してしまい、再び日本の土を踏むことはありませんでした。

遠山参良先生は二一年間九州学院のため精魂を傾け尽力され、今日の九州学院の基礎を築かれました。

一九三二(昭和七)年一〇月九日午前八時三七分九州学院院長住宅に於いて、六七歳の生涯を了え天に召されました。

「九州学院第二代院長 稲富肇」

九州学院　30回卒
稲富　昭

出会いは、一人々々の人間にとって避けることの出来ない神秘に充ち溢れたものである。私は九州学院のキャンパスで1927年に生まれ、1948年まで20年間過ごした。満州事変に始まり、日支事変、第二次世界大戦、終戦という、日本が世界の中で孤立していった激動の時代である。

シャロツビルのヴァージニア大学のキャンパスのように楠の大樹を持ち、芝生を囲んで建てられた校舎は、県立の学校にはない、教育的に優れた機能を持っていた。夕方、校庭に寄宿舎の学生達と寝転んで金色に輝く羊雲を眺めバッタ採りもした。少年時代は人生の中で時間が最もゆっくり流れ、忘れることのできない詩を刻んでいる。

一年生の時、九州学院は創立30周年記念を祝い、財政的にもミッションボードから自立した。入学式に読まれた聖書は詩篇第一編であった。いただいた聖書には「主に在りて喜べ」と記してあった。一年生の一時間目に院長のクラスがあり、「人間と猿は何処が異なるか」という問いかけがあった。小学校を卒業しての初めての哲学的な問いであった。クラスメートは全員興奮して争って手を挙げた。

クラス別の五分間制限のスピーチ大会があり、私は五分間のスピーチ原稿を48回院長から書き直すように命じられ、結果として原稿なしでスピーチを行うことが出来た。学校でクリスマスを祝い、野球をしたのは一年生の時だけで、二年生の12月に太平洋戦争が始まった。

農村奉仕・工場動員と、クラスもそれぞれ分かれ、卒業式はバラバラであった。私の場合は「詩篇23編」が読まれた。

終戦の年、7月1日の熊本大空襲の夜、院長は校舎を守るために出かけ、すぐに戻ってきて私の眼を見つめながら「万一、私が亡くなってもこの懐に聖書を持っていること、全てのことを私は聖書と共に祈り、行ってきた。このことを決して忘れないように」と言い残して、また出かけて行った。

九州学院の教育は毎朝の礼拝・敬愛会・ディベート・コンボケイション・授業など学徒動員における教師との対話を含めて、それはリベラルアーツ教育であった。

今、日本は明治～第二次世界大戦後と続き、グローバル化する世界のため第三の教育大改革に取り組み始め、日本の文部科学省は改革の中心をオールラウンド型・オンリーワン型・複合領域型としている。オールラウンド型のモデルとしてケンブリッジ大学のキングスカレッジを取り挙げている。リベラルアーツ教育はすぐには役に立たない。一人々々の人間が生涯を掛けて証をするときの道しるべになるのである。

九州学院の教育は、オールラウンド型の根底を形作るリベラルアーツ教育であり、私は母校九州学院で受けたそれぞれの個性豊かな教師達、ミラー宣教師御夫妻、また父であり教師であり無二の親友（ザイルカメラート）であった院長に心から感謝を覚えている。

また、それらの働きに全力を傾注して支えた母の存在があった。

川瀬 清先生との出会い

引退教師
古財克成

「名は体をあらわす」といわれますが、戦時体制下、九州学院は九州中学校と改称され校章も変わりました。チャペルから十字架が消え、隣接地には奉安殿が設置されました。九州学院に入学し九州中学を卒業するという矛盾と悔いを負った先生方先輩方も少なくありません。耳にした聖書の言葉に苦境を乗り越え立ち上がろうという希望を覚えました。音楽教室で再開された「敬愛会」の集会で川瀬清院長は「わたしは特別な楽器を吹くことができます」「なんと言う楽器ですか」「いま吹いたとおりですよ」一同大笑いする中で言葉を続け「わたしはいつも真理の言葉を正しく伝えるよう九州学院で学びました。神さまの真理のもとに練達した人として立ち歩むように」と力強く語られました。

川瀬　清先生の優れた人柄に出会い、教え導かれ、生徒の身でありながら、ご家族の暖かい配慮により院長宅の離れの遠山会館で、そこに書かれていた表記聖句を再度見出し継承する証人の群れに加えられた恵みを感謝しています。

「あなたがたは真理の言葉を正しく教え、恥じるところのない練達した働き人になって、神に自分をささげるように努めはげみなさい。」テモテへの第二の手紙2・15（口語訳）

「君いま読んでいるのは蛍雪時代ですか」「はい暗夜行路です」。図書館で川瀬院長と緊張の内に初めて交わした言葉でした。第二次世界大戦が終わり、校舎も街並みも戦災の傷跡が多く残った時でした。川瀬先生は戦時体制から目まぐるしく変化する社会の中で重責を担い、紳士のような筋の通った教育者として九州学院に据えられた土台を再び示してくださったと思います。

全校生徒が集まった講堂で、当時校長を勤めておられた稲富肇先生が職を退き新しく川瀬清先生が校長に就任される報告に接しました。「敬天愛人」の精神の中で育った川瀬清先生こそ、この大事な時九州学院の指導者としてもっとも相応しい方と紹介され、初代院長遠山参良先生が好み口にされ語られた表記聖句（文語）を読まれたと記憶しています。

「死に至るまで福音的」第4代院長池永春生先生

九州学院旧職員
岩崎　國春

先生は、昭和15年から52年まで38年にわたり九州学院の教育に携わり、昭和41年からは、第4代院長として、教育振興と学園の経営に心血を注ぎ、学院充実期を画された。

私ども学院関係者には、常に、学院の存在理由を明示され、教壇に立つ教師の責務を説かれた。

教育の現場では、時勢への対応に追われるなかでも、自らが確信する所に立ち、多くの反対があっても、毅然として事に当られた。

「己には厳しく、人には寛」であり、教職員と生徒の人格を尊重し、人々の声によく耳を傾け、保護者を大切に遇された。

綜合体育館、寄宿舎敬愛寮、特別教室校舎等を建設し、教育環境の整備にも尽力。

この時期、学院の教育活動が特段に活発に、展開し、文化活動や各種スポーツ大会で、数多くの全国レベルの成績を挙げ、昭和51年、教育功労者として文部大臣表彰を受けられる。真摯なキリスト者として、多くの人々に慈父のように敬慕された。絶えず神の恩寵に感謝し、いつも喜び、祈りの人であった。

大学時代に、師と仰ぐ佐藤繁彦先生より受洗。年齢22歳。本人の言葉を借りれば、「苦渋の時を経て歓びの境涯に、無明の闇より光明の世界へと導かれた恩寵のなかで」の大いなる出来事であった。

その後、ルターの一連の著作を貪るように繙読され、一人のキリスト者として旗幟を鮮明に、「死に至るまで福音的」に生きることを決意された。

以来、生涯を通じて、教会生活に忠実であり、教会代議員や日本福音ルーテル教会の常議員等の奉仕の傍ら、熊本YMCAをはじめ、地域のキリスト教諸活動にも、何時も、指導者としての姿があった。

心をこめて説かれる神の言葉は、聴く者の胸を打ちました。すぐれた雄弁家でした。

文筆家としても、色々な分野で健筆を振るわれた。鵞舟と号し、多くの詩文を残された。

学院の30・40・50年の各創立記念日には、自らの賛歌をつくられ、学寮「敬愛寮賛歌」は、今も寮生達に歌い継がれています。

都山流尺八の皆伝免許を有し、多忙のなかでも、よく笛に身をゆだねられる。

昭和52年3月、63歳の定年で院長職を辞したが、乞われて、引き続き「みどり幼稚園」の園長に就任された。

この年の5月、全国園長会議のため上京。その途次、ルーテル市ケ谷センターの宿舎で、突然、誰に看取られず神の許に召されました。

まさに、「死に至るまで福音的」「生涯現役」として、人生の馳せ場を駆け抜いた生涯であった。

今、薫陶を受けた数多くの教え子たちが、世界各地で、「役に立つ善人」として星のように輝いている。

講堂の十字架が消えた

元九州学院教師（保健体育）　平成１３年９月１０日召天　中原康麻呂

九州学院が今のように社会から私立学校として高く評価されていることは大変うれしいことです。

支那事変が昭和十二年に始まってからは常に世間から耶蘇教、アーメン学校と言われ軟弱でアメリカかぶれのミッションスクールとして扱われていました。特に軍人や軍人関係者の諸機関から常に蔑視されていました。

一年に一回学校に偉い軍人が来られて、その学校の軍事訓練がうまくいっているか、いないかを見に来られる制度がありまして、それを査閲と言っておりました。このように軍隊から白眼視されておりました九州学院ですので、生徒の査閲に対する取組み方は熾烈なものがありました。全員一丸となって努力してどんなに立派にできても「一大旨可なり」という評価でした。それは可もなく不可もなく大体普通であるという成績です。生徒達もキリスト教の本当の教えは分かっていませんので九州学院で目立つのは「講堂の十字架」だということで日米開戦後の激しい世間の非難を浴びるようになったとき、私達は盛んに十字架に石を投げました。

後で聞いた話ですが、ある日突然十字架がなくなりました。見かねた先生が十字架を取り外して校庭の隅に埋めておかれました。十字架のない講堂の写真は学校にいくつかあると思います。戦争が終わると勿論講堂の上に復帰しました。

取り外された先生の気持ちを考えると今も断腸の思いです。

（１９９０年9月から16カ月、熊本のFM中九州でルーテル教会の、5分間の自主番組と行われた「ワンショット・コラム」作品より引用）

「Lutheran Church Visitor」に紹介された遠山参良

青田　勇

九州学院初代院長の「遠山参良」の名前が南部一致シノッドの機関紙「Lutheran Church Visitor」に登場したのは、九州学院開校の2年前、1909（明治42）年1月である。それは創設者であるC・L・ブラウンが九州学院の教育事業に関する進捗状況を伝えた記事の中に記されている。

「校長として素晴らしい人材を見つけたので、その人と話し合う予定である。学校の場所の選定が大事であるし、質の高い能力と経験に富んだ人材の確保が最も重要となろう。このような人材を他のミッションより獲得することは難しいので、公立学校から見出すのが最も良い方法であろう。だが、公立学校においては、クリスチャン教師は非常に少ない。なぜなら、金銭的な意味でもミッションの働きに興味を抱かないからである。だが、神の導きにより、私が公立学校で教えていた時、一人の素晴らしい教師に出会った。彼はオハイオ州のノースウエスタン大学を卒業し、ミッション・スクールで5年間、教鞭をとった経験があり、高等学校では10年間、教鞭をとっている。彼は現在の給与として850ドルである。かって彼は、自分の父の負債を払うためにミッション・スクールを辞めた経緯がある。給与のことを考えると、彼が我々の学校の教師になることには困難が予想されよう。」

(LV, 1909.1.21)

ブラウンとの奇遇な出会いに関して、遠山は、1925（大正14）年10月30日に挙行された九州学院礼拝堂献堂式での「献呈之辞」の中で、回想的な思いも込めて語った。その式辞の概要が1925年11月号「るうてる」に次のように掲載されている。

「先生（ブラウン）は1898年即ち明治32年に来熊されたのでありますが私が先生を知ったのは偶然の機會でありました。當時私は長崎にゐたが、時の五高の英語科主任夏目漱石氏から五高に来ないかとの交渉でありましたので熊本に来る途中佐賀から同車した一人の外國紳士がありました。それがブラウン先生であって、それ以来先生と相知る様になったのであります。」

第五高等学校へ英語の講師としてブラウンが出勤した時期は、彼が佐賀から熊本に着任して1ヶ月後、1901（明34）年1月である。そうなると、二人が第五高等学校で出会ったのは、遠山が教授に就任してから1年の歳月が流れていたことになる。この時、遠山は1866（慶應2年）年生れの35才、ブラウンは1874年生れで27才であった。

もう一つ、遠山の写真（添付）と共に彼の印象をほとんど憧れに近い描写で伝えている、1910年8月11日号「Lutheran Church Visitor」の記事を最後に引用しておく。

「遠山参良は、1866年に八代（八代郡境町）で生れた。9歳の時にアメリカの退役陸軍大尉ジェーンズが熊本に開校した洋学校で英語を勉強した。この学校から日本の教会の指導者が生れている。彼も、ここから作られたジェーンズ・バンド（熊本バンド）のメンバーの一人となった。1876年、同志社に入学、2年間、下級学部で学び、そこでキリスト教に深く傾倒した。この時はまだクリスチャンではなかったが、彼の本性そのものはクリスチャンとなっていた。1884年に長崎の鎮西学院に入学し、そこを4年間で卒業した。在学中から一クラスを教え、同時に神学も学んだ。現在、日本語に翻訳されているいくつかの本は彼が在学中に訳したものである。鎮西に入学した19歳の1年後、彼は洗礼を受けた。父、兄弟、姉妹たちがキリストを受け入れるほどの影響を彼は与えた。4年間の学業の後、彼は鎮西学院で4年間、教師として勤めた。それから、1892年にアメリカに渡り、オハイオ州の大学（ウェスレーアン大学）に入って、1895年にそこを卒業し、1896年に修士号を取得した。夏休みには、シカゴにあるコロンビア博物館の展示模様を有名な日本語新聞に書くなどして、大学の授業料を稼いだ。

2年間、アメリカでの学生生活を送っていた日本人女性と結婚した。それから、1年間ほど、講演旅行をした後、鎮西学院の招聘に応じ、今に至っている。2年前に学部主任に就いているが、1年前より活水女学校でも教鞭をとっている。1899年に鎮西学院を辞めて、熊本の第五高等学校英文学部に招かれ、今年の6月まで教授職を勤めてきた。

彼が第五高等学校の教授の職を辞する時、校長が彼の辞任をすぐに認めなかったことからしても、彼がいかに信頼された教師であったかがわかる。念願かなって、今年の6月30日に九州学院院長となった。家族は、妻と二人の子供であり、その一人は今年生れたばかりである。」(LV, 1910.8.11)

1911▶2011
Kyushu Gakuin
100th Anniversary